

顕現後第3主日

2011/1/23

聖マタイによる福音書第4章12～23節
於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

今日の福音書は、イエスさまが宣教活動をガリラヤ地方で開始された物語と、それに続いて4人の漁師を弟子として招いた物語とから成っています。

イエスさまが宣教を始めるきっかけとなったことは、洗礼者ヨハネが捕らえられたというニュースが伝えられたことでした。それを契機に、ユダヤからガリラヤへ戻って、そこから活動が開始されることになりました。

洗礼者ヨハネを逮捕したのは、ヘロデ大王の息子の一人で、ヘロデ・アンティパスという人です。この人は、ヘロデ大王亡きあと、ヨルダン川の東側のペレアという地方と、ガリラヤ地方を治めていた領主でした。そのヘロデ・アンティパスが、自分の兄弟の妻を奪って自分のものとしてしまったことを、そのようなことは律法に反した行為だと、ヨハネは激しく批判しました。ヨハネは権力を恐れずに、神さまの真実に生きたのです。そのため、捕らえられたのでした。

神さまの真実に生きようとする時、わたしたちも時には困難な状況に直面するようなことが起こるかもしれません。勇気を奮い起こすことが必要とされることがあるかもしれません。洗礼者ヨハネは、来るべき方の到来を確信していたので、何ものをも恐れずに語るべきことを語ることができました。わたしたちは何によって恐れを克服するのでしょうか。それは光です。死の陰にある者の中に射し込む光です。命の光です。その光に照らされ満たされる時に、恐れは取り除かれるのです。

ヨハネは「捕らえられた」と記されています。この言葉は、イエスさまが裁判を受け処刑されるために、人々の手に「引き渡された」(26:45)という言葉と同じ言葉です。聖餐式の感謝聖別のお祈りの中で、「主イエスは渡される夜、パンを取り」と言いますが、この「渡される」という言葉です(I コリント11:23)。イエスさまの受難を指す特別の言葉です。

洗礼者ヨハネも、逮捕された後、間もなく首を切られてしまいますが(14:1~)、ヨハネは捕らえられて、殉教の死に向かうこととなりました。その意味でもヨハネはイエスさまの先駆けであったと、マタイは書いているのです。

ヨハネが逮捕され、身柄を拘束されて活動が出来なくなった、その後を継いで、イエスさまの宣教活動は始められました。マタイ福音書では、イエスさまの宣教の第一声は、ヨハネが荒れ野でもって人々に説いた言葉と全く同じ言葉です。「悔い改めよ、天の国は近づいた」と、2人共告げ知らせます。ヨハネはイエスさまの登場を準備するために、悔い改めを強調しました。イエスさまは、ご自身が活動を開始することによって、そこに神さまの支配が始まったと、人々に宣言しています。

この宣教の第一声を、イエスさまはガリラヤから始められました。「ガリラヤに退かれた」と記されていますが、これはガリラヤに引き上げた、撤退したということなのです。

マタイ福音書では、この言葉が既に聖家族の行動に関連して用いられています。ヘロデ大王は、イエスさまの誕生のことを東の国の占星術の学者から聞いて不安を覚えました。学者たちが別の道を通って帰ってしまったことを知ると、激しく怒ってベツレヘム周辺の2歳以下の男の子を皆殺しにしようとしてしました。そのとき、夢で天使がヨセフに現れて、子どもと母親を連れてエジプトへ逃げなさいと告げました。そのお告げの通りに聖家族はこの世の暴虐を避けて「エジプトへ去り」(2:14)とありますが、この「去る」という言葉と、「ガララヤに退く」という言葉は同じ言葉です。

更に、ヘロデが死んだことを聞いて、聖家族はエジプトからイスラエルに帰ってきます。当時、ユダヤを支配していたのはアルケラオという、ヘロデ大王の息子の内でも最も苛酷な政治をした人でした。そのことを聞き、これもまた夢のお告げに従って「ガリラヤ地方へ引きこもり」(2:22)と書かれています。この「引きこもり」も「退く」と同じ言葉です。

聖家族が、夢で示された神さまのお告げに従って行動したように、イエスさまもその宣教活動の初めから、神さまのご計画に従った歩みを開始されたことが、同じ言葉を用いることで描かれているのです。

メシアが到来するときには、エルサレムの都に輝かしく現れると、人々は期待していました。そのエルサレムにではなく、田舎の一地方であるガリラヤに退いて、そこからイエスさまの宣教は始められました。権力者や支配者たちと堂々と立ち向かって天の国、神さまの支配を告げたのではなく、「異邦人のガリラヤ」と呼ばれる、都の人々からは蔑まれていた地方に於いて、宣教は開始されたのです。

ガリラヤ地方は、紀元前8世紀にアッシリアの侵入が行われて以来、外国の勢力に次々と支配され、住民は強制的に移住させられました。その後、外国人が入植して来て、そのために残ったユダヤ人と他民族との間に結婚が行われるようになりました。その結果、民族的にも宗教的にも文化の上でも混じり合うことになりました。そのため、ガリラヤ地方ではユダヤ人の純粋性が失われ、異教的な要素が色濃く残りました。ユダヤ人の目からは、正に暗黒と死の支配する地域でした。そこから福音の宣教は開始されたのです。預言者イザヤによって預言されていたことが、イエスさまの登場によって実現し、暗闇と死を克服する光が射し込んだと、マタイはイエスさまの登場を描くのです。

権力や暴力などによる力の支配、それによって確立される国を目指すのではなく、力によって国を治めることを拒否することが、イエスさまの告げ知らせる天の国です。力と力の対立と対決という道から、イエスさまは退かれたのです。力と力のぶつかり合いというのは、立場が変わることはあったとしても、結局は強いものが弱いものを支配するという仕組みは変わりありません。しかし、天の国は、そのようなこととは無縁です。同時に、天の国の実現のプロセスもまた、そのような力によるものではありません。

この世の秩序は、権力、政治力、金の力、そのようなものによって保たれ維持されています。力がこの世の秩序を保ち、意味を与えています。ところが天の国は、そのようなところから最も遠くにあるもの、力による秩序から最も遠くに退いたところから始まるのです。権力を避けて逃げていった幼子の中に、そして、その幼子と共に天の国は始まったのです。

このような天の国が近づいた、イエスさまと共にやってきた。だから、人々の悔い改めが必要とされるのです。今までの生き方が廃棄されなければならないのです。今までの秩序の中で、自分の立場や自分の位置を見出だして、その立場を少しでも上に向かって上って行こうというような、その仕組み全体とそこでの生き方が、根っこから改められなければならないのです。

4人の漁師たち、ペトロとアンデレ、そしてゼベダイの子ヤコブとヨハネの2組の兄弟は、このようなイエスさまの福音の宣教、呼びかけに従って新たな歩みを始めました。「わたしについて来なさい」という招きに応えました。だから、この世の秩序や価値を象徴し、生活の拠り所である網と舟を捨て、父親を残して弟子たる道を歩み始めたのです。

イエスさまのわたしたちに対する呼びかけ、招きも同じものです。わたしたちの毎日の生活の中で、「わたしについて来なさい」とイエスさまは呼びかけておられます。毎日の生活の中でイエスさまに従っていくのです。それは、わたしたちが、日々の具体的な生活のただ中へ、イエスさまから遣わされているという視点に立って、生活そのものを見直すことから始まります。

わたしたちが大切にしている生活の場はどこにあるのでしょうか。家庭でしょうか。職場でしょうか。ヴォランティア活動でしょうか。或いは、それ以外の何かの働きでしょうか。それが何であったとしても、その場へと、わたしたちはイエスさまによって遣わされているのです。その場のあり方そのものや、そこでの一人一人との関係を、イエスさまに遣わされているという視点から見直すことが、生活の中でイエスさまに従うことの第一歩です。

4人の弟子たちは、イエスさまの招きに「すぐに従った」(20,22節)とあります。答をあとまで保留して、延ばすことをしませんでした。一瞬一瞬の判断と決断の中に、イエスさまに従うか否か、そのことが問われているのです。

わたしたちの毎日の生活が、いつも「主に従います」と躊躇なく答えることのできるようなものとなるように、聖霊の導きをお祈り致しましょう。